

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

英語初級者の英語力とは

著者	佐藤 郁
著者別名	Kaoru SATO
雑誌名	国際地域学研究
巻	20
ページ	37-49
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008762/

英語初級者の英語力とは

佐 藤 郁*

はじめに

筆者は2016年度春学期、国際地域学部生対象の「英作文基礎」という授業を担当した。この科目は複数のコースが開講されており、筆者が担当したのはTOEICのスコアが470点未満であることを履修の条件としたコースである。TOEICの470点は英検では準2級～3級に相当する。英検では2級を「高校卒業程度」としているから、470点未満は高校生以下の英語力ということになる。昨今TOEICのスコアが入試や就職活動、留学など様々な場面で活用されるようになったが、数字ばかりが一人歩きしているような気がしてならない。まず990点を最高点とするこのテストはListeningとReadingの計200問から構成されるマークシート回答式のテストであり、「話す」「書く」力を問うものではない。しかし、たとえば求人サイトで「英語力」を条件に検索すると、「TOEIC 730以上、ネイティブレベル」といった要件が多く見られ、話したり書く力を問われてはいない。もちろん、面接では英会話のテストがあるかもしれないし、高得点者は語彙力・文法力が高いので、書くことにおいても低得点者より質の高い英文を書く力を持っていると言える。しかし、実際には高得点者でも中学校で習うレベルの基本的な文法や語彙のミスは少なくなく、話すことにおいてはとてもネイティブには及ばない。800点以上を取得して交換留学に出かけた本学部生が、いかに英語が聞けないか、いかに話せないかを痛感したと異口同音に言う。

では470点未満の初級者の英語力とは実際にどのようなものであるか、本稿でその一端を明らかにし、自らのそして学科の今後の英語科目指導方法改善につなげたいと考える。

キーワード：英語初級者、英作文、文法、語彙、TOEIC、初歩的ミス

1. TOEIC470未満の英語力とは

TOEIC (Test of English for International Communication) とは、元々米国の非営利テスト開発機関 Educational Testing Service によって開発されたもので、日本では「一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会」が実施している。テストは現在、Listening & Reading Test (以下LRテスト) および Speaking & Writing Test (以下SWテスト)、そして若年層や初級者向

* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

けの Bridge Test の3種類が公開および団体形式で実施されている。一番受験者が多いのが LR テストで、990 点を最高とするこのテストのスコアが、入試・留学・就職など様々な場面で活用されている。また多くの企業が社員にこのテストのスコア上昇を求めて研修を実施している。2015 年には日本で約 255 万 6 千人が受験をした。

協会が公表している proficiency scale (スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表) (http://www.toeic.or.jp/library/toeic_data/toeic/pdf/data/proficiency.pdf) によると、英語能力は最高の A から最低の E の 5 段階に分類され、220 未満が E レベル (コミュニケーションができるまでに至っていない)、221~470 未満が D レベル (通常会話で最低限のコミュニケーションができる)、となっている。英検との比較でいうと、E レベルは 5 級~4 級、D レベルは 3 級~準 2 級程度となる。

本研究で対象とした学生 20 名の受講開始時点のスコアは 200~460 点、平均は 385.9 点、学年は 1 年生~4 年生であった。スコア分布は表 1 の通りである。D レベルに属する 18 名中の最高点は 460 点であったので、80 点刻みにさらに 3 つのグループ (D1、D2、D3) に分けて論じることとする。

(表 1)

	E レベル	D1 レベル	D2 レベル	D3 レベル
スコア分布	200~219	220~300	301~380	381~460
人数 (計 20)	2	2	2	14

スコア分布に偏りがあり、少人数のクラスであっても指導の難しさが当初から予想された。本稿ではプライバシー保護のため、学生を特定して言及する場合には、「D2-2」(D2 レベルに属する 2 番目の学生の意) として表記することとする。この場合の「○番目」は、そのグループのなかでのスコア順位でも名簿順位でもなく、グループのなかでランダムにふった順番であることを断っておく。

2. 語彙 (数・種類) における特徴と差異

「英作文基礎」では、毎回 1 枚の写真を見てその内容を説明する 5 つの英文を書くという練習を実施した。これは LR テストの Listening Part I (写真描写問題) での選択肢に現れる文章、および SW テストの写真描写問題 (Speaking および Writing の双方にあり) を想定したアウトプット練習であり、学期中に 13 回実施した。この作文練習で実際に受講者が書いた英文を検証する。

2-1 語数の違い

第 1 回目に使用した写真は、大きな白い船が停泊している波止場で 7~8 人が釣りをしている様子を写したもので、テーマは「釣り」であった。受講生には 'fishing' (釣り) と 'rod' (釣竿) の 2 語のみを説明し、自由に書いてもらった。その結果 E レベル 2 名はそれぞれ 22 語と 25 語を書き、総語数の平均は 23.5 語。一方、D3 レベルのうち最もスコアが高い 2 名 (D3-2, D3-7) はそれ

ぞれ 23 語と 25 語を書き、総語数の平均は 24.0 語。E レベルと D3 レベルの比較において語数ではほとんど差異は見られなかった。しかし、学期末近くの第 12 回と第 13 回でこれらの 4 名が書いた作文を比較すると、E レベル 2 名の語数は平均 44.5 語、D3 レベル 2 名は平均 49 語で、少しだが差が開いたと言ってよい。

とは言え大きな差とならなかった要因として推測されるのは、D3 レベルの学生でも英文を話すあるいは書くという行為に慣れていないということである。東洋大学の一般入試はセンター試験利用も含め、すべてマークシート使用の選択回答式であり、正解は選択肢の中にある。これらの学生が本学のみを受験したか、他大学も受験したかどうかを確認することはできないが、記述式の回答を入試で実施している大学は現在少なくなっている。TOEIC の LR テストも同様に、正解は必ず選択肢の中にあって、受験生はアウトプットの力を問われない。スペリングを正確に覚えている必要もない。

学期当初、受講生たちは「英文を自ら書く」ということに慣れていなかった。特にこのエクセサイズではなるべく事前の指示を与えずに自由に書かせていたので、学生側は戸惑いが大きかったかもしれない。作文の用紙は全 13 回を通して同じ書式のもので、1 文につき 10～15 語程度のスペースしかない。D3 レベルの学生はスペースがあればもっとたくさん書いていたかもしれない。

2-2 語彙の種類

1 回目の釣りをテーマにした写真の英作文練習では、‘rod’（釣り竿）という語を事前に示したにもかかわらず、この語を使った受講生は一人もおらず、筆者はショックを受けた。筆者としては「釣り人たちが釣り竿を持っている」「4、5 本の釣り竿が見える」などの文が書かれることを想定していたからである。3 文字しかない簡単な語であるのに、なぜこの語が使われなかったのであろうか。理由として考えられるのは、受講生たちにとって釣りは身近なレジャーではなく、したがって「釣り竿」も馴染みのある使いやすい語彙ではないということ。また、これまでの英語学習の中でこの語を習ったり、使ったりする機会があまりなかったということ、などであろう。確かに『ジーニアス英和辞典』（大修館、第 5 版）では「大学生・社会人に必要な語」に分類されている。たとえ短くとも、見たこと聞いたことのない語には抵抗があるようである。

受講生 E-2 が 1 回目に書いた計 25 語の語の種類は 16 種（it, is, the, blue, beautiful, sky, sea, are, eight, people, a, white, big, ship, fine）である。2016 年度に全国の中学校で最も多く（33.8%）使用された英語教科書『NEW HORIZON 3』（東京書籍）掲載の Word List に照らし合わせると、ship 以外の 15 種の語のうち blue, white, fine は 3 年次、その他が 1、2 年次初出となっている。また ship も前出の『ジーニアス英和辞典』では中学学習語となっている。一方 1 回目に最も多い語数（40 語）を書いた 2 名のうち 1 名（D-3-11）の使った語の種類数は 19、もう 1 名（D-3-3）は 26（two, girls, sitting, on, the, chair, are, fishing, a, man, is, talking, to, who, wears, red, jacket, building, stands, other, side, of, river, sky, blue, three）であった。D-3 レベルと E レベルとでは明確な差があるが、D-3 レベルでも使われた語は易しい語ばかりで、20 種のうち chair と fishing 以外はすべて中学学習語である。このことから、英和・和英の両方を搭載した電子辞書があっても、使える語は普段使っている語を中心とした限定的なものであり、そして語彙数の多さと語数の多さは比例関係にあると言ってよいだろう。

この英作文のクラスに関する研究とは直接関係ないが、学部で2016年8月に実施したマレーシアでの研修を担当したマラ工科大学の英語教員から興味深い話を聞いた。研修参加者のTOEICのスコアは事前に知らされていたが、研修開始時にレベルチェックテスト（選択式ではなく記述式）を実施したところ、おおむね低い点数だったため、基本文法（3人称単数現在の場合はsをつける、などといったようなもの）を含む練習問題を用意して授業を行ったところ、研修参加学生から苦情が出たというのである。苦情の内容は、「教材が簡単すぎる」「3単現ぐらいわかっている」というものであった。研修後に筆者が参加学生に行ったインタビューでも「教材がつまらなかった」という意見が複数から聞かれた。できないからといって中学レベルの教材を使うと、このように学生の学習意欲を低下させてしまうリスクがある。牧野（2013）は「英語を読むことが苦手な学生たちに英語絵本の読書を行わせ」（p.352）、語彙力が向上したと報告しているが、「子供じゃあるまいし」と学生に嫌がられないようにするためには教員の周到な準備と工夫が必要であろう。

どうしてレベルチェックテストの点が低かったのかとマラ工科大の教員から尋ねられ、筆者は答えに窮したのだが、このことについて考えていた筆者は、英作文の授業をふりかえるなかで、次のような考えに至った。おそらく、「見ればわかるが、ゼロから（自ら）正確に作り出すことは難しい」ということなのではないだろうか。本学の入試問題に出されるいわゆる「整序問題」（語を並べ変えて英文を完成させる問題）のように、材料があれば文を作ることができるが、日本語だけ与えられてゼロから英文を作れと言われるとハードルが高くなる。大学入試対策が最重要である高校の現場では、作文や会話、発表といったアウトプットに必要な英語力を養成する時間の確保は後回しになっているだろう。筆者は2015年4月から1年間、東京都教育委員会のモニターを務め、ある都立高校の授業を見学する機会があった。「進学指導特別推進校」に指定され、難関大学への合格者を多く排出している高校であったが、3年生の「オーラル・コミュニケーション」の授業で行われていたのは、センター試験のリスニングテストの問題演習であった。「オーラル」はOral（口頭の）とAural（聴覚の）の両方を含むものであるから、その授業内容と科目名に齟齬があるとまでは言えないが、入試対策授業であることは明らかである。（なお、1年生の授業では日本人教員が英語で授業を行い、ペアで会話の練習などを行っていた。）本来、「コミュニケーション」は双方向のものであるが、高校の実情としては大学入試に向けて、インプット（単・熟語の暗記、文法の学習、読解演習、リスニング対策）中心の授業にならざるを得ない。残念ながらアウトプットは置き去りである。

2-3 基礎的文法力の欠如

（例1）Pink yukata wearing a lot of adult women is dancing on the street. （E）（原文ママ）

ピンク色のそろいの浴衣を着た一団が通りで盆踊りをしている写真の描写である。衝撃的な英文ではないか—これが6年間英語を学習して大学生になった者の英作文であるとは。is以下は文法的に英語の語順に則っており間違いはない。しかし前半部分を見た際、筆者は絶句してしまい、この学生を今後どのように指導したらよいか途方に暮れた。「ピンク色の浴衣を着ている大勢の大人の女性が」と表現したかったのだろう。完全に日本語の語順そのままである。もしこの学生の意を汲むなら、“A lot of adult women wearing pink yukata are …”と書くのが正しい。この文からわか

ることは、初級者は修飾語句の（少）ない第1～第3文型であれば何とか書くことができるが、そこに修飾語句が加わると正しい位置や構造を判断したり自ら作ることができなくなる、ということである。藤森（2012）も初級レベルの学生に対しては主語と述語が1組で構成される単文を書けるようになることを指導の中心に据えることが適切であると指摘している。

このEの学生は「(女性たちが) 通りで踊っている」を *women is on the street dancing* と書かずに、*women is dancing on the street* と書けていることから、ごく単純な文であれば理解でき、自ら表現できる力はあるということがわかるが、しかし、この段階でもすでに主語が複数形でありながら動詞を *is* にしているというミスがある。このようなミスを指摘すると学生は決まって「あ・・・」と反応する。単純なミスを指摘され直す機会があまりないままに中学・高校時代を過ごしてしまったのか、それともこの学生がもともと単純なミスを犯す傾向の高い学生なのかは判断の難しいところである。例えば他科目で日本語でレポートを作成する際にも単純ミスや漢字の間違いが多いとしたら、注意力不足が十分に疑われるだろう。学習全般に対する態度や生活習慣の改善が必要なケースもある。関（2008）は勤務した短期大学での指導例として、「生活習慣を改善する」「学習計画を立てる」「成功への期待値を高める」「学習法にバリエーションをもたせる」「英語学習を自分で適切に管理・調整する」「仲間と協力する／支援態勢を確立する」の7つを挙げている。一人の教員が1クラス20～30数名の学生すべてに対しこれらすべてを指導することは困難である。例えば例1について関は学習習慣記録をつけさせたところがあるが、教員が全員のぶんを毎週チェックするのは難しい。作文のクラスであればそれ以前に提出物の添削、小テストの採点などに時間を要するからである。しかし、学生一人一人について、これらのうち一つでもきちんと指導して徹底させることができれば、英語力向上のきっかけとなりうるかもしれない。筆者が以前指導した学生で、長期留学を希望して TOEFL-ITP を受け続けたがなかなか点が伸びない学生がいた。そこで学期初めに機会を設けてじっくりと話を聞いてみると、学習していないわけではないのだが、まとまって集中して学習する時間がきちんと確保できていないことが判明した。まじめな学生だったため、大学の授業も難易度の高いものや課題の多いものなどを履修しようとしていたが、家計が厳しくアルバイト時間を削ることが難しかったので、今は TOEFL の勉強を最優先にしようとして話し合い、負担があまり大きくなりえないような履修の計画をたて、同時に1週間の大まかなスケジュールをたてさせた。この学生には、その当時大学で無料で提供していたアルク教育社の e-learning「アルクスマートラーニング TOEFL 対策講座」を受講させ、1日2時間、週に10時間を目標に学習することを約束させた。3か月間で40時間以上学習し、学習開始以前には480～490点付近だった点数が530点を突破し、留学に行くことができた。これはうまくいったケースだが、実際には個々のスケジュール見直しや生活習慣の改善まで指導することは難しい。あくまで科目の担当教員であってクラス担任やゼミ担当ではないし、学生のほうから相談があれば応じるが、その機会はそう多くない。

(例2) A girl wearing an apron for baking cookies, but by contrast She's mothers not wearing an apron. (D-2) (原文ママ)

母娘と思われる2人が一緒にクッキーを焼いている写真の描写である。この文を書くにあたり、

“but by contrast”という表現を使用し、母と娘を対比する文章を書くようにと指示した。この学生の致命的な欠点は動詞を正しい形にできないことにある。この文章であれば wearing ではなく、wears または is wearing とするのが正しい。「エプロンを（身に）つけている」は動作の進行ではなく、状態であるが、「着ている」という日本語表現に惑わされるのか、学生の頭の中では進行形ととらえられているようである。「着ている（wear）」は英文法上進行形で表現することも現在形で表現することも可能で、おそらく学生としては進行形のつもりで書いているのだが、進行形に必要な be 動詞が2回欠落している。進行形の根底にある「～しているところである」という「動き」の概念は恐らくこの学生にはない。1回の be 動詞の欠落なら不注意も有り得るが、2回となると不注意ではなく、進行形が身についていないことの証明である。また、文中にもかかわらず she が She と突然大文字になり、mother は複数形で書かれている。そして “She’s mothers” という信じられないような表現を使っている。おそらく my mother, your mother と言うことはできるが、his mother, her mother になると正確に表現できなくなるのであろう。一人称、二人称の範囲内はよいが、三人称以上の広がりになると正確さが途端に落ちる。人称代名詞の格は中学校1年で習うことであるので、この学生のつまずきはかなり初期で、しかもそれが長年放置されてきたと推測される。

またこの学生は、文末にピリオドを打つ習慣がなく、再三再四の注意によって学期末には書くようになっていたが、今また英文を書かせたらきちんと打つかどうかはわからない。また、文からしばしば動詞が欠落していた。This glass in the orange juice. (このコップにはオレンジジュースが入っている。) A lot of people on a hat. (たくさんの人が帽子をかぶっている。) 使った動詞も種類が少なく、be 動詞が多く、従って「～は・・・である」という第2文型が圧倒的に多かったのがこの学生のレベルの低さを示している。中学校1年生で初めて習うのがこの文型である。

(例3) Four person rides a small boat. (D-3-10) (原文ママ)

3人の男女が湖上でボート遊びしている写真である。口頭でも説明していたのに人数の勘違いする点からしてこの学生は注意散漫なのかもしれない。文法的には単複の概念が非常に薄いのがこの学生の特徴である。本来は Four persons ride…となるべきところ、この学生は person rides と書いており、単複がごちゃまぜになっている。同様のミスは他の回にも見られた。Two people is …や、There are four turbine…などである。主語と述語（動詞）の不一致は他の多くの学生にも見られる顕著な特徴であったが、単複で綴りの変わる woman は特にミスが多く、there is three womans や a women といったミスが多発していた。なお、ride は馬や自転車などに乗るときに使う動詞で、「ボートに乗る」や「ボートに乗っている」と言うときには普通用いない。学生が英作文をするときの特徴のひとつに、語だけを調べて用例・例文を参照しないという特徴がある。和英辞典で「乗る」を調べ、ride が出てきたからそれを使う。和英辞典でももちろん用例は載っているのだが、そこまで見る習慣や余裕がないのだろう。用例を参照するようにと繰り返し指導したが、どれだけ定着したかはわからない。

3. 英語力の向上はあったか

1学期間 15 回講義のうち、1 回目は講義ガイダンス、15 回目は長い作文の作成に取り組んだため、写真描写の練習を含む通常授業は 13 回実施したことになる。13 回の授業でどれだけの英語力の向上が期待できるかを学生 2 名を詳細に分析し、検証する。受講開始時のレベルと進捗に関連性があるかどうか検証したかったため、欠席のない学生を選びたかったが、E レベル 2 名はともに欠席が 1 回あったため、無欠席だった例 1 の学生との比較は正当なものとは言いにくい、ある程度の傾向はつかめるものと思う。本人が書いた文章の後に、正しい文章を加えてある。また、下線のある語はスペリングミスのある語である。

(例 1) D3-10 の学生 (欠席なし)

1 回目の作文 (計 23 語)

- ① Sky is blue. (The sky is blue.)
- ② It's veautiful weather. (The weather is fine.) (beautiful weather とは通常言わない)
- ③ There are many people near fence. (There are many people near the fence.)
- ④ There is big ship. (There is a big ship.)
- ⑤ Ship on the sea is white color. (The ship on the sea is white.)

13 回目の作文 (計 50 語)

- ① A wearing black cloth man is pointing to pie chart on the screen. (A man wearing black clothes is pointing to a pie chart on the screen.)
- ② One person is standing and another people is sitting. (One person is standing and the others are sitting.)
- ③ A sitting women is operating computer and hearing explanation of presenter. (A sitting woman is operating a computer and listening to the explanation by the presenter.)
- ④ White wall get dirty and became black. (The white wall has got dirty. 「白い壁が黒くなる」をそのまま英語にするのは適当でない。black は文字通りの黒であり、ここでは「黒ずむ」(get dark) とすべきである。)
- ⑤ A little bit small pie chart could not wach well. (A small pie chart could not be seen well.)

学期初めの 4 回の平均語数は 36.25 語、学期末の最後の 4 回の平均は 45.25 語であり、語数は明らかに増加し (9 語)、語の種類も増え、語の難易度も高くなっている。この点ではこの学生の英語力は向上したと言ってよいだろう。一方文法・語法のミスは最後まで直っていない。13 回目の②では写真には 4 名の人物が映っているが、この学生は「他の人たちは座っている」を another people is sitting と書いている。another の使い方も間違っているし、「他のひとたち」は複数であるから is ではなく are と書くのが正しい。また、③では woman を women と書いている。この学生は 3 回目にも同じミスをして、教員が添削指導したが、残念ながら 1 回の指導だけでは足りなかったということだろう。おそらく長年このミスをし続けてきたに違いない。

(例2) E-1の学生 (欠席1回)

1回目の作文 (計25語)

- ① It is the blue sky.
- ② It is the blue beautiful sea.
- ③ There are eight people.
- ④ It is a white big ship.
- ⑤ It is fine.

13回目の作文 (計42語)

- ① The people are watching the presentation and it is difficult.
- ② There are two men and two women.
- ③ She uses a PC in the foreground of the picture. (A woman in the foreground of the picture uses a PC.)
- ④ The man who put on blue clothes looks wise. (The man who puts on blue clothes looks wise.)
- ⑤ I can see they seem tense. (「彼らが緊張している様子が見える」という意味だとしたら、I can see they are nervous. あるいは They look nervous. が適当。)

学期初めの4回の平均語数は28.25語、学期末の最後の4回の平均は36.25語であり、語数は例1の学生とほぼ同じだけ増加し(8語)、語の種類も増えた。しかし、残念ながら使用する語の難易度はあまり高くなっていない。そして当初この学生には自ら作成できる構文の種類がきわめて少ないという特徴があった。1回目はIt isで始まる文が4つもあり、残りの1文もThere is構文である。13回目は一応5文それぞれが違う主語になっており、文のレベルは依然中学生程度のものであるが、それでも進歩があったと言っていいだろう。また、この学生のユニークな特徴は、単純な文しか書けないが、文法や綴りのミスが少なかったということである。

以上、2人の学生の例を詳細に比較検討してわかることは、「初級レベル」「基礎レベル」と言われる英語力の学生には、下記のような特徴が見られるということである。

1. 多くの語数を扱うことができない。(自ら作り出すことができない。)
2. 使用できる語は中学校で学習したレベルのものが中心。
3. 語の綴り間違いと、覚え間違いが多い。(覚え間違いとは、womanの複数形をwomans、goの過去形をgoedとするなど。)
4. 基本的な文法を習得していない。
5. 使える構文が限定的で、第2、第3文型が圧倒的に多い。

しかし、例2の学生のように、語彙力はないが基礎的な文法を理解しているというケースもあることがこの検証により明らかになった。これは予想外の嬉しい発見であった。スコアが低い＝英語ができない、と思い込んでいる筆者にとって、例2の学生はいわば英語を習い始めたばかりの中学1年生のようなものだと思えばよいのだと考えることができるようになった。

語彙数と語数には相関関係がみられることはすでに述べたが、上記の5つの特徴すべてが必ず関連しているというわけではなく、個々の学習者のこれまでの学習時間や学習環境、そして性格などの影響も受け、それぞれの特徴を形作っているものと推測される。例2の学生はクラブ活動に多くの時間を割いている学生であったので、もっと英語の学習時間を増やし、集中して学習すれば、大きく英語力を伸ばす可能性があると感じられた。学期途中に受講生にアンケート（別途掲載）を実施して21名から回答を得たが、質問項目の1「中・高時代を振り返り、英語のつまづきポイントがありましたか？ あったとしたら、どんなことでしたか？」に対し、「文法」と回答した受講生が11名おり、半数に至った。また、その11名のうち2名は「中学校時代」と回答、また4名が「高校に入ってから」と回答している。しかし、実は高校で扱う新規の文法事項は仮定法と分詞構文ぐらいなもので、そのほかは皆中学で学習していることである。おそらく、高校に入り、大学受験に向けた長文読解の学習が増え、語彙の難易度が上がるあたりから文法ひいては英語全体への苦手意識が顕在化してくるのではないだろうか。

また、アンケートで「添削を受けるようになってどんなことに気をつけるようになったか？」という質問に対しては、「同じ単語でも状況に応じてどのように使うか辞書で調べるようになった」「3単現に気をつけるようになった」「同じミスをしないように気をつけた」「文を見直すようになった」「動詞の形が適切か気にするようになった」などの回答を得た。無意識にミスを繰り返してきたこれらの学生たちには「気づき」や「再確認」が最も有効な療法である。13回の添削で完全に治療できたとは思えないが、少しでも彼らの英語に対する意識が変わってくれたことを願っている。

4. 英語学習意欲との関連

英語ができない＝英語学習意欲が低い、と一概に決めつけることは危険である。確かに中には「この単位がとれないと卒業できない」という理由でしかたなく履修しているやる気のない学生もいるが、あまりにも英語ができなくて恥ずかしい、少しはできるようになりたい、外国人と友達になりたい、海外旅行をもっと自由に楽しみたいという気持ちで取り組んでいる学生も少なからず見受けられる。3で言及したアンケートには「英語ができるようになったら何をしたいですか？どんなことができるようになると思いますか？」という質問項目もある。これに対し、「海外旅行をしたい」「海外に住みたい」と回答したのが7名、「外国の人と話せるようになりたい」などコミュニケーションの希望を回答したのが7名であり、この2種の回答が拮抗していた。他には、語学力を活かして就職する、洋画を字幕なしで観るなどの回答があった。

また、先にとりあげたD-3-3、D-3-11の2名は開講時にはともに400点代であったが、同時期にTOEICの講座も受講し、7月のテストでは前者が220点、後者が120点アップを実現した。さらに、先のアンケートでは「子供のときから英会話スクールに通い、英語が好きだったので苦手だ」という意識がなかったが、大学に入ってTOEICを受けたら点数が低くて自分でも驚いた」と書いた学生もいた。習熟度別クラス運営の難しさは、このクラスのように「レベルの低いクラス」と明示されている場合、はじめから学生に「英語弱者」とレッテルが貼られているようなものだという点

にある。大学生には大学生のプライドがあるので、先に述べたマレーシア研修の教材の例のように、「ばかにされている」と感じるような教材や指導をしては学生の学習意欲をそいでしまう。しかし、実際には3単現のsをつけ忘れるのだから、教員としては対処対応に困ってしまう。彼らの自尊心を傷つけないよう配慮しながらも、中学校レベルの基礎英語をやり直すことはなかなか難しく、教師の力量と情熱が問われるところである。

5. カリキュラムと活動の展望

大学の英語教育について、「実用的でない」とか「使える英語を教えるべきだ」とかという批判をよく聞くが、それに対しての私の反論は「実用的な英語とは何か」「使える英語とは何か」再考した上で批判してほしいということである。「実用的」という言葉の裏に想定されるのは、日常生活の場や旅行先での必要最低限の会話であろう。それでいうなら本稿でとりあげた学生たちにはすでにその力はあるだろう。あいさつと片言の英語（単語だけ並べて、正確な文章にはなっていない）でも会話はある程度成立するからだ。相手が助け舟を出してくればなんとかなる。予想外のトラブルに巻き込まれない限りはガイドブックやスマートフォンを駆使して、海外旅行をすることができる時代である。子供のときから英会話スクールに通っていて苦手意識がなかったという学生は、十分なコミュニケーション力を持っているのではないか。

また、「使える英語」という言葉の裏に想定されるのがビジネスの現場で英語が使えるようになることだとしたら、大学ではなく中学校・高校での6年間の英語教育をもっと確実なものにしなければ大学の英語教育は有意義なものになりにくい。基本の5文型をマスターする場は大学ではなく、中学であるべきだ。She's mothersではなくher motherが正しいと教え、覚えさせるのは大学の英語教員の役割ではない。近年大学において盛んに「リメディアル教育」（学力の低い学生のために行う補習あるいは再教育授業）が実施されるようになっており、それに関する報告や研究も増えてきたのは皮肉なことである。高校までにやるべきであることを大学でやるようになったら、高校では何をやるというのだろうか。

これまで見てきたように、TOEICでD、Eレベルの学生が大学在学の4年間のうちにAレベルを取得することはかなり困難な状況である。中高の6年間で学んだことがきちんと身につけていれば、それを土台として、TOEICに出てくるようなビジネス系の語彙、留学希望者であればIELTSやTOEFLの学習を行い、そして専門科目のレポートや卒業論文の作成時に必要となる英語文献の読解の練習をすることができる。しかし、中間試験、期末試験の前に「この辺出るから覚えときなさい」と言ってなんとか及第点をとらせてくれるような指導を受けて中・高の英語をごまかしごまかし切り抜けてここまできた学生に対し、大学で今更何を教えればいいのかと徒労感を覚えることは少なくない。このような学生は、自分一人では何を使得どのように英語を勉強すればいいのかかわからず、また英語学習での成功体験も少ないために自律学習も継続が難しい。

彼らはいわば現在の日本の学校制度および大学入試制度の犠牲者なのかもしれない。フランスのように、小学校でも落第することがあるような国と違い、公平・横並びが「教育的配慮」とされている日本では、試験で低い点をとれば追試を何度もして及第させ進級させ、そして卒業させる。筆

者は1年生の必修英語クラスを担当する場合、年度の第一回の授業の際に、高校までのような追試や補習は大学では行われないと説明すると、驚きの表情を見せる学生が散見される。日本の中学・高校では、徹底的に理解させることが最優先ではないのだ。大学もまた「多様な人材を受け入れ育てる」と言いながら、定員を確保するためにはそのような未習熟の生徒も受け入れなくては経営が難しい。本当に受け入れたい受験生だけを受け入れることができるのは、日本の大学のうちごくわずかな大学に過ぎない。学生を選べない大学は、受け入れた学生の力を見極め、彼らの力を少しでも伸ばす努力を続けなくてはならない。筆者が所属する学部は2017年に改組され、新学部として生まれ変わる。また、学科では今まで以上にグローバル社会で活躍できる人材の育成を促進し、留学者数の増加をはかるため、5週間の海外英語研修を必修とする。さらに、これまではどちらかというと課外の講座に任せていた TOEIC、IELTS、TOEFL の試験対策を行う授業科目をカリキュラムの中に設置することとした。1997年に開設された学科にとって、英語はあくまで教養科目の位置づけで、どのような進路や希望にも対応できる一般的な英語力を身に着けることを目的としてカリキュラムを構成してきたので、今回のカリキュラム改訂は大きな方向転換となる。

おわりに

受講生の英語力が伸びたかどうかを判断するには、同一のテストを学期冒頭と最後に2回実施するのが有効な方法と思われる。今回はそれを実施しなかったため、正味13回の授業を受講したこれらの学生の英語力がどれだけ伸びたか、正確に測ることはできない。また、この授業を受講していたのと同時期に他の英語科目を受講していた学生が多く、課外の有料の TOEIC 講座や英会話講座を受講していた学生もいたので、もし英語力に伸びがあったとしても、この授業だけの成果であるかどうか判断できないだろう。

だが、ピリオドを打たないことが習慣になっていた学生、進行形が正しく使えない学生、woman と women を正しく使い分けられない学生など、彼らのミス無くすには何らかの個人指導が必要不可欠と考える。英会話の授業であれば、学生同士のペアワークではなく、教員が学生をマンツーマンで指導し、根気よくミスを指摘して訂正させることが有効なはずである。しかし、ミスの指摘が連続すると学生は劣等感を強くし、学習意欲を失うおそれもある。また、中には「(仲のよい友達以外との) ペアワークやグループワークは面倒くさい」という、コミュニケーションが苦手な学生もあり、教員に求められる配慮や授業形態も多様化してきている。すべての学生の満足のいく授業をすることは難しいが、レベルの低い学生であっても、できることをおろまぜ、自信を持たせて学習意欲を失わせることなく学習の継続をはかることが肝要であろう。東洋大学では学修支援室という機関があり、様々な科目の学習を支援する講座を開講している。英語については外部の業者に委託し、基礎文法からの学習を丁寧に根気よくしてもらっているが、受講料が廉価であることもあってか、受講希望者が多いと報告されている。筆者個人としても「できない=やる気がない」と決めつけずに様々な試みをしていきたいと考えている。

[参考文献]

三省堂 英語教科書・教材 中学校英語教科書ホームページ

<http://tb.sanseido-publ.co.jp/english/newcrown/index.html>

関昭典 (2008) 「自律的に英語学習を進める力を養成する指導 短大での実践例」大修館『英語教育』第56巻第12号

大学英語教育学会基本語改訂特別委員会 (2016) 『大学教育学会基本語リスト 新 JACET8000』桐原書店

大修館編 (2011) 「特集 英語リメディアル教育を考える～大学での取り組み・高校からの見方」

『英語教育』第59巻第12号

藤森吉之 (2012) 「習熟度別クラス編成により顕在化された初級レベル大学生の基礎英語力」白鷗大学『白鷗大学論集』第26巻

牧野真貴 (2013) 「英語リメディアル教育対象クラスにおける授業改善の試み—スポーツ推薦入学生クラスの事例報告—」近畿大学法学会『近畿大学法学』第61巻

[アンケート項目]

1. 中・高時代を振り返り、英語のつまづきポイントがありましたか？ あったとしたら、どんなことでしたか？
2. 英語の4技能がどのように得意・不得意ですか？（「話す」「聞く」「読む」「書く」）
3. この授業での添削で、これまでどのようなことを指摘されましたか？
4. それを指摘されてから、英語を書く際の意識は変わりましたか？ どんなことに気をつけるようになりましたか？
5. 英語ができるようになったら何をしたいですか？ どんなことができるようになると思いますか？

A Study of Elementary Level Learners of English

Kaoru SATO

The purpose of this paper is to examine how English level of students with the score under 470 in TOEIC LR are. I taught a class of English writing in spring semester, 2016, and made my students write simple five sentences to describe a picture 13 times. This drill is based on Part I of TOEIC listening test, 'Describe a picture' section and 'Write a sentence based on a picture' section in TOEIC SW. Although some students made progress through these exercises, elementary errors in spelling or grammar found in almost all the students did not disappear till the end of the semester. In this research, I try to find the reasons why they make elementary errors repeatedly, and find the solution to improve their English skills.

Key words : elementary level learners, English writing, grammar, vocabulary, TOEIC, elementary errors